

二〇一四年度 一般三月入学試験

国 語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は33ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国

語

(60分) 100点 (解答番号)

1

46

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

自宅ならびにその近傍においては、阿久正は決して、いるかいないかわからないような人間ではなかったが、彼の細君が、「うちのひとはうちべんけいなのですよ」といったように、彼は会社では大へんおとなしい男だった。彼は東京深川のうまれで、そこに育ち、丸ノ内のある電気工業会社につとめていたが、すでにわれわれのみたごとく、あらゆる不便をかえりみず、通勤に片道二時間もかかる場所に、小屋を建てて引越したのだった。二時間もかかって、人群中にもまれ、毎日通勤していた会社で、彼がどういう仕事をしていたか、⁽¹⁾つまびらかではないが、とにかく商業学校中退で、いわゆる庶務系統なる系統に属する人間であつたことは確かだった。大へん凡帳面^{きちやうめん}で、朝早く、朝露をふんで口笛など吹きながら出かけてゆき、夕方にはきちんと定刻に帰ってきたが、当時、彼はしばしば定刻より少しおそく帰宅することがあり、そんな時、かれは細君に向かつて、⁽²⁾呟^{つぶや}くともなく、こう言つたものだった。

——きようはいそがしかったよ、宴会がいちどきに六つもあつたんだ、それがまた、みんなべつべつの料理屋でね。

もしも知らない人がこれをきいたならば、阿久正という男は若いくせに、いちどきに六つの宴会に顔をだす大物だと思つたかもしれないが、実際いうと、彼はただ宴会の準備のため、電話をかけたなり、奔走したりして、忙しかったのに過ぎなかつた。当時、会社の費用で飲み食いする会社員たちの宴会がさかんで、申し込み殺⁽²⁾トウし、料理屋の席をとるのが一仕事だつたところから、庶務課長は阿久正に宴会準備係という臨時の職名を与え、勤務外勤務を命じたのである。彼はもちろん宴会には出なかつた。そしてこの宴会準備係という勤務外勤務は臨時手当なしだつたが、彼は文句をいわなかつた。彼はなんでも唯々⁽³⁾諾々としてやる方だつたが、これにはまた、料理屋からのなんらかのゾウ与⁽⁴⁾、つまり役得なるものもありつことも、少しは考慮に入れていいだろう。私は一度、彼が折り詰め^{ふた}の蓋もあけないで、そのまま、近所の野良犬に投げ与えているのを見たことがある。

(5) 青年よ、大志をいだけ、というのはどうやら阿久正を素通りした言葉だった。彼にはおよそ大志とか野心とかいうものはなかったばかりか、そういう言葉に対する消極的な反応すらもなかったようである。つまり、「ぼくにはそんなものないよ」などと、言いはしなかったのである。彼にはただ、目前に与えられた事務をきれいさっぱりと片付けたいという意欲いよくがあるだけだった。いかいしないかわからない、というよりもむしろ、彼はいつも必要な場所にちゃんといたのである。彼は算盤そろばんがたくみで、字がうまく、事務にたんのうだった。いかなる書類も彼のところで停7タイしなかった。人生のことを、生まれてから死ぬまで、すべてこれ事務として、右から左へ片付けてゆく秀才がいるそうだが、彼には、少し誇張していえば、若干8その素質がないでもなかった。そして、いかなる時も彼は落ち着いていて、彼の事務机はいつもきれいに整頓されていた。電話をかけるときの彼の声は非常に低く小さかったが、それは大なる騒音のなかにあつても、はつきりと相手に通ずるのだった。

阿久正は進んで仲間たちと一しよにスポーツをやることなどなかったが、人員が足りなくなると、かれらはすぐ阿久正のことを思い出した。⁽⁹⁾

——阿久をよんでこいよ、とかれらは言った。

こうして彼はひっぱり出されて、ヴァレーボールをやったが、そんなとき、彼はどんな与えられたポジションにでも文句なしにすぐついた。そして、その持ち場に、例によつてしずかに立っていた。それでいて、ボールがとんでくると、正確にはじきかえたのである。ボールはどこへとんでくるかわからないのだが、彼はいつもその行き先にちゃんと立っていた。静かにしていることが、能率をあげる第一条件だった。

——阿久さんは、はらはらさせるわね、もうだめかと思つた瞬間に手が出るんだもの、でも攻撃はだめね、と見物の女社員が批評した。

こんなわけで、彼は守備一点張りで、決して攻撃的な位置に立たされることはなかった。

また、阿久正はメーデーのデモ行進にも参加したことがある、だが、はつきりした意識があつたわけではない。帰つてきて、彼は細君にこういっただけだった。

——みんな歌を歌っていたよ、ぼくも一しよに歌ったが、歌わない人たちもいたよ、ムシロ旗なんかおつたててね……

同僚たちが休憩して、雑談を交わしているときなど、彼もみんなと一しよに休憩していたが、ただゆつくりとお茶をのんで、話をきいているだけで、話に参加することはなかった。顔には、いかにもその話をきいているような表情をうかべていた。そして他人から話しかけられると、最小限度の返答をするか、「いやどうも」とか「そうですね」とかいつて、うなずくだけだった。もしもそれが猥談わいだんであつたりすると、彼は困つたように顔を赤らめるのだった。

このように、おとなしくはあつたし、よく仕事をしたから、さぞかし彼は上役からのうけがよかつたらうと思われるのだが、それが必ずしもそうでなかつたようである。どこといつてわるいところは無いが、気心がどうもわからない、というのが、直接の上役が彼に対してイダ10いた感じだった。そして同僚たちは、彼をあんまり問題にせず、ほとんど無視していたのである。

しかし、一度こういうことがあつたそうだ。彼が入社して間もなく、古くからいる年とつた社員が、ビルの屋上へ彼をつれてゆき、いろいろと勤務上の忠告などをしたとき、初めのうちは彼は神妙11にきいていたようだったが、話が長びいて、だんだん昇給だとか、貯金だとかいうことになつたとき、彼は伸ばしかけの頭髪をかきながら、いよいよ出かかつたあくびをおさえていたというのである。

それから、彼は宴会準備係ではあつたが、その宴会というものに、ぜんぜん興味を持つていなかった。年に一回か二回、彼もどうしても出なくてはならない社員の宴会の席上では、彼は当然ながらずっと隅すみつこのほうにおとなしく坐り、黙々として食べるだけで、酒はぜんぜん飲まなかつた。みんなが笑うと、彼もそれに便乗して笑つた。ときどき彼は失敗して、みんなが笑いやんでしまつたとき、笑い出すこともあつた。それから、だんだんこういう宴会につきものの、隠し芸の発表というやつが近づいてくると、彼は早くもそわそわしはじめて、いよいよその時がくると彼はいつの間にか姿をくらましていたのだつた。しかし、これがなかなか巧みに行われたので、ひとびとは彼の存在とともに不在にも気づかなかつたのである。いちど彼は逃げおくれ、この隠し芸にひっぱりだされたことがあるが、そのとき彼はこじれた頑固な子供のよう12に、決していかなる芸もやらなかつた。そのため、騒然たる席上が、一瞬しーんとしずまつたほどである。主任が彼を自分の席の前に呼んで坐らせた。そして自分のな

めた盃さかずきを彼に持たせ、それに酒をついで、むりに彼に飲ませた。彼はほんの少しなめた。主任が言った。

——きみ、たまにはハメをはずさんか。

しかし彼はとうとうハメをはずさなかった。というよりも、はずすハメなるものがなかったのである。彼は主任の前から退くと、洗面所へゆき、口をすすいだ。こういうのが会社における阿久正だった。もしも重役とか課長とか、そんな偉い人たちが、いわゆるエンマ帳みたいなものをもっており、それには阿久正にいたるまで記載されていたとすれば、あるいは、性やや陰かげケンなどと書かれてあつたかもしれない。

こんな具合だったから、彼は決して、いわゆる立身出世をのぞんだのではなかった。彼は黙って、いるかいわからないように働いた。そして、ただ眼前の事務を手ぎわよく片づけることだけが、彼の喜びだった。職人がなにかを作るように、彼は事務を処理した。従つて彼の望んだのは、昇給や昇進ではなくて、むしろ出来高払いの賃金だったのである。けれども、たとえ上役の気にいらなくても、彼のように一つの場所で（彼は決して職場をかえたり、転任になつたりすることを欲しなかった）実直に働いておれば、いつかはなにかの係長くらいになるかもしれない。彼はそれを避けがたき自己の運命としてあきらめていたようだった。

ある時、私は魚釣りにいって、彼と一しよになり、帰り途みち、なにかのはずみに言ったことがある。

——きみだつて、いずれは主任でしようね？

彼は頭かぶをふつて、無邪気に笑つた。

(17) あんな白髪頭かみになるのかなあ。

これが私と彼の交わした最後の会話だった。

（長谷川四郎『阿久正の話』による）

問1 傍線番号(1)・(3)・(6)・(11)・(16)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤からそれぞれ一つずつ選
びマークしなさい。

1

5

(1) つまびらかで

1

- ① よく知られて
- ② 重要で
- ③ 詳しく明らかで
- ④ 一定して
- ⑤ 興味を持たれて

(3) 唯々諾々として

2

- ① 人に媚びへつらつて、何でも人の言うことを聞いて
- ② 自分で考えることができず、言いなりになって
- ③ 自分の思う通りに、自由にして
- ④ 自分の意見を主張せず、ただ人の意見に従って
- ⑤ 心の中では反感を持ちながら、人に従うふりをして

(6) たんのうだった

3

- ① 身も心も捧げていた
- ② 熟達していた
- ③ 振り回されていた
- ④ 変なこだわりがあった
- ⑤ やりがいを感じていた

(11)

神妙に

4

- ① 興味を持って熱心に
- ② おとなしく素直に
- ③ 真剣そうなふりをして
- ④ 妙に神経質になって
- ⑤ わけが分からず不思議そうに

(16)

なにかのはずみに

5

- ① 凶に乗って
- ② 気が楽になって
- ③ 成り行きで
- ④ 調子が出て来て
- ⑤ 話がずれて

問2 傍線番号(2)・(4)・(7)・(10)・(14)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

6

10

(2)

殺トウ

6

- ① 追トウの辞を述べる
- ② 資料を元にトウ議する
- ③ 雑トウの中を歩く
- ④ 好機がトウ来する
- ⑤ 民主主義が浸トウする

(4)

ゾウ与

7

- ① 母校にピアノを寄ソウする
- ② 人口がゾウ加する
- ③ 愛ゾウ相半ばする
- ④ 土ゾウに宝物を収納する
- ⑤ ゾウ船業がさかんな町

(7)

停タイ

8

- ① タイ然とした態度
- ② そのガラスはタイ熱性だ
- ③ 職務のタイ慢を責められる
- ④ 熱のタイ流を利用する
- ⑤ 税金をタイ納する

(10)

イダいた

9

- ① 海外に住む同ホウ
- ② ホウ声が鳴りひびく
- ③ 多くの問題をホウ含する
- ④ 今年のホウフを語る
- ⑤ 模ホウして描いた絵

(14)

陰ケン

10

- ① 角を曲がって二ケン目
- ② 真ケンに勉強する
- ③ 冒ケン家が山に登る
- ④ 男女ケン用の子供服
- ⑤ インターネットでケン索する

問3 傍線番号⑤「青年よ、大志をいだけ、というのはどうやら阿久正を素通りした言葉だった」の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

11

- ① 「阿久正」は、大志や野心という言葉の本当の意味を理解していなかったので、それは存在しないも同然の言葉であったということ
- ② 「阿久正」は、あえて大志や野心といったものについて考えないようにすることで、事務の能率をあげようとしていたということ
- ③ 「阿久正」にとつて、大志や野心は肯定することも否定することもなくらい、自分にとつて関係のないものであったということ
- ④ 「阿久正」は、大志や野心を心の中にいだきながらも、表面上はただ事務を処理しているだけだと見せようとしていたということ
- ⑤ 「阿久正」のような人間には、人から「青年よ、大志をいだけ」という言葉が投げかけられるようなことはなかったということ

問4 傍線番号(8)「素質」とあるが、ここではどのようなことを意味しているか。その説明として、最も適切なものを、次の

①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

12

- ① 人生のどのようなことでも、事務的な事柄として淡々と処理することができる生まれつきの能力のこと
- ② 人生のいかなる時でも、すべての事を事務と考えて落ち着いていられる生まれつきの能力のこと
- ③ 与えられた事務を、きれいさっぱりと片付けることができる生まれつきの能力のこと
- ④ どのような事務であっても、ただ淡々と処理することができる生まれつきの能力のこと
- ⑤ 会社のあらゆる事務仕事を、右から左へと素早く片付けてゆくことができる生まれつきの能力のこと

問5 傍線番号(9)「かれらはすぐ阿久正のことを思い出した」とあるが、その理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤

⑤の中から一つ選びマークしなさい。

13

- ① 「阿久正」は「ヴァレーボール」の守備が得意であることを、「かれら」は知っていたから
- ② 「阿久正」は静かにしているのでスポーツに参加させても邪魔にならないことを、「かれら」は知っていたから
- ③ 「阿久正」より上手な社員はいるが、人員調整のためなら便利であることを、「かれら」は知っていたから
- ④ 「阿久正」は文句も言わずに「かれら」が望む役割を的確にこなすことを、「かれら」は知っていたから
- ⑤ 「阿久正」は見物の女社員をはらはらさせて面白いということを、「かれら」は知っていたから

問6 傍線番号⑫「主任が彼を自分の席の前に呼んで坐らせた」とあるが、この時の「主任」の心情の説明として、最も適切な

ものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

14

- ① 宴会の席で隠し芸をできない「阿久正」に対して、芸の練習をしておくように注意したかった
- ② 宴会の席で頑固な態度をとる「阿久正」を、場にふさわしいくだけた態度を取るように諭したかった
- ③ 盃を酌み交わすことで、自分だけは味方であることを「阿久正」に伝えたかった
- ④ 宴会の席で酒をぜんぜん飲まない「阿久正」に、酒を飲むことを教えたかった
- ⑤ 自分の盃で酒を飲ませることで、「阿久正」に上役としての権威を示そうとした

問7 傍線番号⑬「はずすハメなるものがなかったのである」の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

15

- ① もともと酒を飲めない体質だったために、皆と同じように酔っ払うことができず、いっしょになって騒ぐことはできなかったということ
- ② 今まで芸を覚える機会がなかったので、盛り上がった宴会の場でどんなに要請されても、芸をすることができなかったということ
- ③ 普段は几帳面でまじめな人間として通っているので、宴会の席で調子に乗って騒ぐのは、普段の行動や態度からは想像がつかなかったということ
- ④ たとえ上役からの指示であったとしても、会社の人の前で調子に乗って芸を披露してやる義理はないと思っていたということ
- ⑤ 調子に乗って度を超さないのは、行動や態度をわざと抑えているのではなく、普段通りに振る舞っているだけだったということ

問 8 傍線番号(15)「彼の望んだのは、昇給や昇進ではなくて、むしろ出来高払いの賃金だったのである」とあるが、その理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

16

- ① 昇給や昇進をするためには上司の機嫌をとるなどの面倒なことがあるので、事務を処理していればよい出来高払いの方が気楽だったから
- ② 事務処理が得意な「彼」にとっては、出来高に応じて払われる賃金の方が、昇給や昇進によって得られる賃金よりも高額だったから
- ③ 昇給や昇進をすると会社の中で目立ってしまうので、出来高払いの賃金で淡々と事務を処理して目立たないでいたかったから
- ④ 出来高払いの賃金であれば、与えられた事務をいかに効率よく処理するかという、「彼」にとって最も重要なことを心置きなく追求できるから
- ⑤ 「彼」は事務を能率よく処理することが得意なので、出来高払いの賃金で実直に働いていればそのうち昇給や昇進を望める立場になれるから

問9 傍線番号(17)「あんな白髪頭になるのかなあ」とあるが、この時の「彼」の心情の説明として、最も適切なものを、次の

①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① 「主任」になる頃には自分もずいぶん苦勞を重ねて、「白髪頭」になってしまふことを危惧している
- ② 「主任」になれるとはまったく思っていないので、「私」がちょっととした冗談を言っただけだと思っている
- ③ 「主任」になることを喜ぶことができず、「主任」といえば「白髪頭」という印象だけでとらえている
- ④ 「主任」になることは考えたことがなかったので、「私」が言ったことの意味がさっぱりわからないでいる
- ⑤ 「主任」の座をひそかに望んでいることが「私」にばれてしまったので、とぼけてはぐらかしている

問10

本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

18

- ① 「阿久正」は、「うちべんけい」と細君から評されていたが、周囲の人たちと積極的に関わろうとして、いちどきに六つの宴会に顔を出したこともある
- ② 勤務外勤務とはいえ会社から宴会準備係という職を任命された以上、役得を手にするのは気が引けたので、「阿久正」は料理屋からもらった折り詰めは蓋も開けないまま野良犬に与えた
- ③ 「阿久正」にとっては、「ヴァレーボール」も「メーデーのデモ行進」も与えられた事務仕事であって、それに参加することは事務を処理しているのと同じである
- ④ 「阿久正」にとっては宴会の席での芸も、上役と盃を交わすことも会社から与えられた事務仕事にすぎなかったので、指示された通りのことだけを淡々とこなした
- ⑤ 「阿久正」は、几帳面だけが取り柄で野心も立身出世への欲も持ち合わせていないが、だからこそいずれは大いに出世するであろうと「私」は考えている

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

かたちを持たない認知過程、感情の土台に立つて、分節され、輪カク⁽¹⁾を持つ表象性の心理過程が生成する。⁽²⁾これが知の活動である。ここでいう「知」は、知識の「知」の意味とは少し違う。知識よりずっと広く、心の表象過程のすべてを表す意味で用いている。心理学という認知の「知」にほぼ対応する。

われわれは対象を見るのではなく、対象を知るのである。対象を聞くのではなく、対象を知るのである。われわれは、われわれの周囲に存在する対象のすべてをそのまま知覚するのではない。対象の中から生きてゆくうえで必要な部分を切り出して、われわれの心の中に再現(表象)するのである。

われわれの前に風景が広がっているとすると、この風景をわれわれは空と陸に区別する。空をさらに雲のある部分と雲のない部分とに区別する。陸地を山と平地に、あるいは山と丘とに区別する。平地をまた野原や、畠⁽³⁾や、水田に区別する。道路や川を区別する。さらに植物と土を区別するし、石と土も区別する。これらわれわれが区別し、知覚する対象は、本来的に環境世界に存在しているものではあるが、それ自体はわれわれに関係はない。

環境からの刺激に応じて、心にこうした「かたちあるもの」(心理表象)を生成し、かつこれらの表象をさまざまに操作するのが、知の働きである。世界をベタ一面の、多様な色サイ⁽³⁾や明暗の連続としてでなく、「かたち」の集合としてトラ⁽⁴⁾え、その働きによって世界を「知る」のである。

このような「かたち」の切り出し(分類、あるいは範疇化⁽⁵⁾と呼んでもよい)は、視覚や聴覚など感覚様式ごとに行われるが、それだけにとどまらない。感覚様式ごとに範疇化された表象は、さらに異種の感覚様式由来の表象と重ねられて、それらに共通する「表象」が抜き出される。

たとえば、道端に転がっている石ころである。この「石ころ」は視覚的なイメージとして知覚される。しかし、視覚的表象だけだと、遠い世界の「かたち」に過ぎない。この表象が、その石ころを持ったときの感触(体性感覚的な「かたち」)、投げたり、

落したりしたときの響き（聴覚的な「かたち」）など、異種の感覚表象と統合されたとき、新しいレベルの表象が作り出される。とりあえずは、木でもない、泥でもない、水でもない。そのようなもろもろから区別できる一つの超感覚性知覚表象が作り出される。

(5) ことばは、この超感覚性知覚表象をもう一段高い表象（概念表象）に転化させる。

(6) 、この超感覚性知覚表象に名前「イシ」が与えられる。この音韻形「イシ」が、さらにさまざまに (7) 、具体的な「石ころ」の表象を大きく一つにくくる働きをする。この働きによって、概念「石」が生成される。

名前が一段高い概念形成にいくに重要であるかは、三重苦の世界に苦しんだ、かのヘレン・ケラーの挿話⁽⁸⁾で有名である。手に冷たい水を受けるたびに、てのひらにサリバン先生が書き付ける water という綴り⁽⁹⁾。この綴りがてのひらが感じているものの名前であり、この冷たい感触を与えるものが water という名前を持っているということの発見。続いての、すべてのモノは名前を持つているのだ！ という洞察。ここでヘレンの精神は具体的、直接的な感覚の世界から、抽象的、概念的なことばの世界へ飛翔する。まわりの世界（もつと正確には彼女の心）は、名前によって秩序を確立してゆくのである。

こうして生成された、非言語性の、ある特定感覚様式に局限した表象（たとえば色サイのイメージ・視覚イメージ）、二つ以上の感覚様式を横断する表象（たとえば大空を旋回するトンビのイメージ・視覚イメージと聴覚イメージ）、あるいは言語性概念など、さまざまな心理的観念表象を操作することで、さらに複雑な概念（たとえばセンテンスのような連結語が作り出す概念）、あるいは思想が生成される。これらすべてが「知」の働きである。

こうした表象世界は左右大脳半球新皮質を中心に生成される。

とくに左右大脳半球の中心溝より後方の領域が重要である。この領域は、体性感覚情報、視覚情報、聴覚情報、その他の情報が処理され、さらにおたがいに統合される領域である。これらの情報は言語化されることもあれば、言語化されない場合もある。言語化される表象は主として左半球寄りに形成され、言語化されたい表象は主として右半球寄りに形成される。

A

意識↓感情↓認知と来て、最後に意の世界が現れる。「意」という語にはさまざまな意味が込められているが、ここで用いる「意」の意味は意思／意志／意図など、いろいろな単語が表そうとしている意味での「意」であって、「行動に方向を与える心の働き」の意味である。あるいは、心がみずから、一つの行動を起こす働きと言ってもよい。反射性、反応性の行動でなく、(10)に行動を開始する働きである。

B ある場所、ある時点で、個体が実際に実現する行動はただ一つである。この一つの行動を選択する働きである。ドアを開けようと思ったときに、ドアを開ける行動とドアを閉める行動が同時に開始されたのでは、目的は達成されない。開けるのか、閉めるのか、どちらかの行動でなければならない。どちらかを選ぶという選択があつて、はじめて目的が実現される。

C 話すという行動にも意が働いている。そのときそのときに、多くの可能な表現（レパトリー）の中から一つの表現を選び出す、という過程が常に働いているのである。字を書くにも意が働いている。多くの可能な文字の中からある一つの文字を選び出し、書き下さなければならない。

D 意の働きは、行動に必要なだけではない。考える、という心理過程にもなくてはならない。夢を考えてみれば、おおよそ意の働いていない思考状態というのがどんなものか想像できよう。夢では実に多様な心理表象が、⁽¹¹⁾荒唐無稽な動きを示す。突然、異形の間が壁を通り抜けて現れるし、布団の中にあるままで、⁽¹²⁾首相官邸で田中角栄氏（古すぎてごめんさい）と握手をしたりする。畳の上において、しかも富士山の上から、その風景を見ていたりする。意が働いていないと、われわれの心の中にため込まれた多様な観念表象⁽¹³⁾知が、脈絡なく組み合わされて動き出す。

E まとまった行為を実現するには、何段階もの意の働きが必要である。お茶を飲もうと思えば、茶碗ちawanもいれば、お湯もいる。茶

の葉もいる。しかもこれらを寄せ集めて、まとめなければならない。それぞれをどの段階で使うかも、決めなければならない。新しいシャツを買おうと思えば、お金を準備しなければならない。出かけるという行動もある。店を選ぶという行動もある。さらには欲しいシャツを選択しなければならない。財布と相談して、値切るといふ行為も必要かもしれない。

(13)、一つの意図を実現するには、大きな枠での行動の選択に始まり、その行動を実現するための、小さな枠での行動の選択、そのまた行動実現のためのもつと小さな枠での行動の選択、というふうにならざるにさまざまな段階での選択と決定という過程が繰り返される。

小さい意志はそのときそのときに働くが、大きい意志は長い時間をツラヌいて働く。⁽¹⁴⁾もつとも大きな意志は一生を通して活動する。「志」といふ美しい文字は、この心の働きを一字に凝縮している。

意は、知を材料に個体を未来へ向かわせる心の働きなのである。

(山鳥重『ヒトはなぜことばを使えるか 脳と心のふしぎ』による)

問 1 傍線番号(1)・(3)・(4)・(12)・(14)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

19

23

(1)

輪カク

19

- ① 砂上の楼カク
- ② 台所をカク充する
- ③ 外務省の外カク団体
- ④ 野菜を取カクする
- ⑤ 市民カク命

(3)

色サイ

20

- ① 団体旅行を開サイする
- ② 一国のサイ相
- ③ 借金を完サイする
- ④ 精サイを欠く演技
- ⑤ 意見をサイ択する

(4)

トラえ

21

- ① 衣冠ソク帯
- ② 販売をソク進する
- ③ 無病ソク災
- ④ 憶ソクをめぐらす
- ⑤ 実態を捕ソクする

(12)

官テイ

22

- ① 法律にテイ触する
- ② 技術テイ携をすすめる
- ③ テイ位を譲る
- ④ 著作を進テイする
- ⑤ 豪テイを訪問する

(14)

ツラヌいて

23

- ① カン禄のある人物
- ② 作戦をカン行する
- ③ カン顔の至り
- ④ カン用句を覚える
- ⑤ カン隊が出港する

問2 傍線番号(2)「これが知の活動である」とあるが、その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

24

- ① 認知した対象を必要なものと不必要なものに区別し、必要なものだけを自分の知識として蓄える活動
- ② 知覚した対象を環境からの刺激に応じて分類し、必要か否か吟味したのちに蓄積していく活動
- ③ 知覚した対象を認知し、自分にとって必要なものだけをかたちあるものとして心に生成する活動
- ④ 認知したあらゆる対象を感覚様式ごとに分類し、それらすべてに共通するかたちを心に生成する活動
- ⑤ 知覚によって獲得した対象のイメージを複数の対象の表象と重ねて、それらに共通する表象を抜き出す活動

問3 傍線番号(5)「ことばは、この超感覚性知覚表象をもう一段高い表象(概念表象)に転化させる」とあるが、「もう一段高い表象」の例として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

25

- ① たまたま拾った美しい石が、調べてみるとある宝石の原石だとわかった
- ② 我が家に咲く花と隣家の花とが、色こそ違え同種の花だと気づいた
- ③ よく見かけるノラ猫を、勝手に名付けて呼んでいるうちに妙に愛着が湧いてきた
- ④ ことばで表すことの難しい心情を、絵画で表現することで他者に訴えることができた
- ⑤ 春咲く花々をイメージすると、春ということばが形あるものとして意識される

問4 空欄番号

マークしなさい。

(6)
・
(13)
・
26
・
27

に入る語句として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び

(6)
26

⑤	④	③	②	①
そこで	とはいえ	たとえば	あるいは	だからこそ

(13)
27

⑤	④	③	②	①
しかるに	さらに	やはり	従って	つまり

問5 空欄番号

マークしなさい。

(7)
・
(10)
・
28
・
29

に入る語句として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び

(7)
28

⑤	④	③	②	①
総合的	観念的	象徴的	個別的	主体的

(10)
29

⑤	④	③	②	①
客観的	自発的	感覚的	心理的	分析的

問6 傍線番号(8)・(9)・(11)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び
マークしなさい。

30

32

(8) 挿話

30

- ① 悲しくも美しい情味ある話
- ② しゃれをきかせた短い話
- ③ 話題の人に関するちよつとした話
- ④ 文章または談話の間に挟む短い話
- ⑤ 読者を感動させる美しい話

(9) 洞察

31

- ① 物事を観察して、その本質を見抜くこと
- ② 物事をよく調べて、様々な可能性を探ること
- ③ 物事の状態や変化を、ひそかに見守ること
- ④ 自分自身を省みて、その善し悪しを考へること
- ⑤ 細かい点まで立ち入って、厳しく詮索すること

(11) 荒唐無稽

32

- ① 大げさで乱雑なこと
- ② とりとめがなく根拠がないこと
- ③ 束縛されずのびのびしていること
- ④ 真偽がはっきりしないこと
- ⑤ つじつまの合わないこと

問7 次の文章を挿入する箇所として、最も適切な所を、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

33

われわれは成長の過程で多くのことを経験し、多くの行動レパートリーを蓄えてゆく。意はもつとも単純には、ある目的を欲したときに、これらの行動レパートリーの中から必要な行動を選択する過程である。

- ⑤ ④ ③ ② ①
E D C B A

問8 本文で述べられている内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

34

- ① われわれが知覚し認知するものの多くは、われわれの生活に直接関係しないために分節され表象性を獲得することはない
- ② われわれはさまざまな感覚様式を通じて表象を範疇化し、ことばによって名付けることで初めてそれらに具体的なイメージを与える
- ③ 脳の左半球は言語化される表象の、右半球は言語化されがたい表象の形成をつかさどっているが、両者を統合する「意」の機能こそが最も重要である
- ④ 「意」は行動に方向性を与える働きをもち、それ無しではわれわれの行動は支離滅裂なものとなり、社会的な活動に支障をきたすのは必至である
- ⑤ 「意」を生涯を通じて活動する意志にまで高めるためには、「志」という美しい文字を心に刻んで生きることが肝要である

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(20点)

をさなきものあり、兄を久二といひ、妹を糸とよぶ。しばらく閑を得て机によれば、やがて「とと、とと」とよびて筆を握り書をちらす。これをすかせばよろこびてさらにかたはらをさらす。また白眼を見れば、泣きおちて耳かします。「こがねも珠もなにせん」と愛せしむかしの人の心にはたがひて、つねにはらだたしくくみがちに、いまさらになにおひ出づらむとうちつぶやかるる折もあるに、出づれば門にまち、いれば袖にすがりなどする時は、さすがに捨てがたきものから、兄を膝にすゑ、妹を左にかきのせて三猿のあそびをなす。そのさまけしからず。久は眼をふたぎ、糸は耳をかくし、我は中に在りて口をおほふ。これ三戸をさるといふ。庚申の夜の神すがたなりとぞ。これを三猿のあそびとなづけて、朝三暮四にかくしつつ戯る。かの五禽のたはぶれより心をやしなふことはまされり。またつくづくおもふ、久がにくさげなる眼ざしの、人ともならばかりの色を見ては、かく目ふたぎてはかなきすさびに身をはふらかすな、小姫が物の情けしるほどにもならば、いつはりおほきたはぶれごとに耳ふたぎて、花にうつろふ人のことのは、ゆめききいるるな、五色は人の目しひ、五音は人のみみしひせしむとぞ。扱われはつねに無益の弁をこのみて人とあらそひ、或はうらみいかられて、くゆる事あまたたびあり。犬のよくほゆるをよしとせず、人のよく物いふを賢しとせずとかや。今より此の物いはずるのかたちを、わが身のいましめとして、ながく口をして鼻のごとくならしめむと、やがて三猿の箴書きてみづからいましめ、かつかの二子にわかちあたへ侍る。

(『三猿箴』による)

(注1) 白眼——冷淡な目つき

(注2) 三戸——人間の体内に住むという三匹の虫のこと

(注3) 庚申の夜の神すがた——三猿の像の姿をさして「神すがた」と言っている

(注4) 五禽のたはぶれ——「五禽」は、虎、鹿、熊、猿、鳥のこと。これら五つの禽獣の真似まねをして、血液の循環をよくする養生法のこと

(注5) 「五色は人のくせしむとぞ」——「五色」は赤や白などの五つの色。「五音」は音曲の五つの音色。これらの色や音は強く

人を引きつけて、その視覚や聴覚の機能を失わせると『老子』にあるのを指す

(注6) 箴——いましめとなる短い言葉

問1 傍線番号(1)・(6)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

35

36

(1) すかせば

35

- ① だますと
② おだてると
③ なだめると
④ 見やると
⑤ 読み上げると

(6) けしからず

36

- ① 異様である
② 不都合である
③ 樂しげである
④ 仲がよさそうである
⑤ だらしなさそうである

問2 傍線番号(2)・(8)の口語訳として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

37

38

(2) さらにかたはらをさらす

37

① 決して習字をやめない

② ずっと仲間と遊ばない

③ いつでもそばを離れない

④ 全く言うとおりにしない

⑤ みつともなくて恥ずかしい

(8) はかなきすさびに身をはふらかすな

38

① 心細いほどの貧しさに身を落とすな

② ちよつとした言葉に身をまかすな

③ 心ない批判に身を振り回されるな

④ つまらない遊びに身を落ちぶれさせるな

⑤ 巧みな言いまわしに身を惑わされるな

問3 傍線番号(3)「こがねも珠もなにせん」と愛せしむかしの人の心にはたがひて」とあるが、これはどういうことか。この

説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

39

- ① 「金も宝玉も子どもにまさるはずがない」と言つて我が子だけをひたすら愛し続けた昔の人に反発するということ
- ② 「金にも宝玉にも大して心を引きつけられない」と言つて子育てに専念した昔の人の考えは間違っているということ
- ③ 「金や宝玉のように子どもの命は尊い」と言つて貧しさに負けず我が子をいとおしんだ昔の人の考えとは違うということ
- ④ 「金や宝玉があれば子どもを立派に育てられるのに」と言つて我が子をいつくしんだ昔の人の思いとは違うということ
- ⑤ 「金も宝玉もすぐれた宝である子どもに及ぼうか」と言つて我が子をかawaiiがった昔の人の思いとは違うということ

問4 傍線番号(4)・(7)の文法的説明として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

い。 40

・ 41

(4) なにおひ出づらむ

40

- ① 名詞十ラ行四段活用動詞の未然形十推量の助動詞の連体形
- ② 名詞十ダ行下二段活用動詞の終止形十現在推量の助動詞の終止形
- ③ 副詞十ダ行下二段活用動詞の終止形十完了の助動詞の未然形十推量の助動詞の連体形
- ④ 副詞十ラ行四段活用動詞の未然形十推量の助動詞の終止形
- ⑤ 副詞十ダ行下二段活用動詞の終止形十現在推量の助動詞の連体形

(7) にくさげなる眼ざし

41

- ① 名詞十ラ行四段活用動詞の連体形十名詞
- ② 名詞十断定の助動詞の連体形十名詞
- ③ 名詞十形容動詞の連体形十名詞
- ④ 形容動詞の連体形十名詞
- ⑤ 名詞十格助詞十ラ行四段活用動詞の連体形十名詞

問5 傍線番号(5)「さすがに捨てがたきものから」とあるが、その理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

42

- ① 「とと、とと」と呼びながら、筆を握って字を書き散らす子どもの姿がかわいいので
- ② 親がいくら腹立たしいと思っても、泣き叫び追いつがる子どもがあわれなので
- ③ 親を慕って少しの間も離れようとしめない子どもの姿があまりにいらしいので
- ④ 子どもが生まれてきたことを、親として喜べないと思っていた自分が情けないので
- ⑤ 親の身を案じて帰りを待ち、その無事を喜ぶ子どもの姿が見るに忍びないので

問6 傍線番号(9)「花にうつろふ人のことのは、ゆめききいるな」とあるが、これはどういうことか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

43

- ① 花のように外見の良い男の事を決して信用してはいけないということ
- ② 美しい人に心を寄せる男の言葉を決して聞いてはいけないということ
- ③ 花が枯れるように疎遠になる男の事を決して追いかけるなということ
- ④ 美しい人に心を動かす男は夢見がちだから、その話を聞くなということ
- ⑤ 花のようにはかなく死んでしまう男の言葉は夢のようなものだということ

問7 傍線番号⑩「ながく口をして鼻のごとくならしめむ」とあるが、そう決意した理由として、最も適切なものを、次の①～

⑤の中から一つ選びマークしなさい。

44

- ① 自分が饒舌じょうぜつなことは、賢明さの証明にはならないと気づいたから
- ② どんなことにも動揺することなく冷静沈着でいようと思つたから
- ③ 子どもたちに対して自分がよい手本になるべきだと考えたから
- ④ 生きていく上で大切なことはとにかく我慢することだと感じたから
- ⑤ 自分はいつも口数が多く、人と争うことになつて後悔したから

問8 傍線番号⑪「かの二子にわかちあたへ侍る」とあるが、「三猿の箴」を子どもたちに与えるのはなぜか。その理由として

最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

45

- ① 成人した子どもたちが三猿の箴をひもとくことで、幼い頃を思い出して父親のことを忘れないようにするため
- ② 子どもたちが三猿の箴をそばに置いておしゃべりを慎み、無用の口論を避けて幸せな人生を送るように祈るため
- ③ 三猿の箴を座右の銘として、子どもたちが汚れた世の中から遠ざかり、純粹さを失わずに生きていけるようにするため
- ④ 子どもたちが世間の笑い者にならないように、またみじめな人生を送らないように三猿の箴を身近に置かせるため
- ⑤ 三猿の箴を戒めの書として、子どもたちが将来、身を持ち崩したり甘い言葉にだまされたりしないように念ずるため

問9

本文の出典である『三猿箴』は江戸時代に成立した夏目成美の俳諧文集『四山藁』しざんこう所収のものであるが、江戸時代の同じジャンルの作品として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

46

- ① 玉勝間
- ② 折たく柴の記
- ③ 世間胸算用
- ④ おらが春
- ⑤ 東海道中膝栗毛